

まちやむら、そこに住む人びと（=ざいち）の、
知恵や生き方（=ち）から学び、実践する活動です。

ざいちのち

No. 10 2009. 08.

京都大学

生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所 「在りと都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

高島市 椋川

守山フィールドステーション

古絵図による勉強を始めました

聖泉大学 高谷好一

守山FSでは、2009年度の月例研究会を始めました。その6月の例会では、「古絵図を囲んで、みんなで語ろう」というのをやりました。これが大変面白いことになり、「古絵図勉強会」なるものをスタートさせよう！という勢いにあります。

守山の市街地には、今のところ3種類の古絵図があります。一つは、いわゆる「地券取調総絵図」です。これは、明治新政府が旧村に命じて作らせた、旧村ごとの絵図です。ひとつの旧村が、畳1枚から4～6枚ぐらいの大きさに作られています。土地利用がちゃんと色分けされていて、番地なども入っています。二つ目は、故宇野宗祐氏が1951年（昭和26年）

に作った一種の鳥瞰図です。市街地の部分が畳1枚ぐらゐに描かれていて、中心部では1軒ずつの同定が可能です。三つ目は、守山駅前だけの限られた部分ですが、1955年（昭和30年）頃に作られた、一種の住宅配置図です。これは、故木村善光氏の作ったもの



図1:昭和30年代の守山駅前絵図部分 (木村善光氏作)。

(図1)で、各家の屋号などが描き込まれています。

土地の古老に参加してもらって、これらの地図を見てもらったところ、賑やかな話が広がっていきました。この手法で、情報を集積していきたいと考えています。この数年が、この手法で情報を得る最後の時期かな、と考えています。

「琵琶湖在来魚のナレズシ」漬け込み体験

守山FS 研究員 嶋田奈穂子

6月20日、27日の2日間にわたって、琵琶湖在来魚のナレズシの漬け込みを行いました。守山FSでは、去年に続いて2回目の体験会です。両日、早朝4時出発のエリ漁と、9時からの朝市を見学し、その後、漁師さんから提供していただいた琵琶湖在来魚をさばいて塩漬けにしました。琵琶湖から揚げた魚をさばき、塩漬けにする今回の工程を“塩切り”といいます。「今から塩切りやと、ちょっと遅いさかい、小ぶりの魚がエエな。大きいのは三枚におろしたらエエわ。」と、戸田さんからのアドバイス。塩切りは、魚の余分な水分を抜き、殺菌するための工程です。数ヶ月はみておく必要があり、魚が大きければ大きいほど日数が必要になります。その次は、塩切りした魚の塩を洗い流して天日干しにする“塩抜き”、それを飯に漬けかえる“本漬け”という工程があります。本漬けしてからナレズシが完成するまでに数ヶ月が必要と言

われています。これを逆算すると、今の時期の塩切りでは、少し遅い…ということになるのです。今回、体長20cmほどの小ぶりのフナは、形そのままにウロコとエラノド骨、腹ワタを取り除いた状態で、体長50～60cmのニゴイやハスは三枚におろして塩切りしました。その他にも、オイカワ、ワタカ、カマツカなどを漬け、桶4つ分の塩切りができました(写真1)。使った塩は25kg! このように、ナレズシには多くの手間と時間、そして塩が必要なのです。にもかかわらず、滋賀の伝統食といわれるように、受け継がれてきた理由はいったいどこにあるのか。美味しさだけではないでしょう。この工程を通して、考えてみたいテーマです。

梅雨の晴れ間の暑いなか、ご参加くださった皆さん、そしてご協力いただいた守山漁協・湖友会の浦谷善次さん、今江光夫さん、戸田直弘さん、ありがとうございました。



写真1:塩切りした桶。塩と魚を交互に詰め、重石をおく。

森を拓けば

朽木 FS 研究員 増田和也

■森の伐開を完了

これまで地元の協力者・永井邦太郎さんの紹介で、焼畑地を菅波地区の財産区（共有林）に決定し、4月中旬に地元の方々と顔合わせをしました。林野の伐開作業の開始は遅れたものの、6月から7月にかけて林野を拓きました（写真1、2）。今は、伐採した草木がよく燃えるように太陽の日差しの下で乾燥中です。火入れは8月10日。ぜひお越しください。



写真1: 焼畑予定地、伐開前の状態(2009年5月)。点線あたりを拓きました。



写真2: 伐開作業もいよいよ終盤(2009年6月)。

■ヤマグワのこと

伐開の作業をしていたときのこと。作業の合間に、加勢に来ていた地元の方々と雑談を交わすなか、ふいにヤマグワのことが話題となりました。

余呉の焼畑では山カブラやソバ、アズキなどの一年生作物の後に桑を育てた、ということ、これまで伺っていました。また、焼畑地の選定のことを尋ねると、まず道路に近いことが条件に挙げられ、これは焼畑で収穫した桑の搬出を考慮してのことだといいます。焼畑で幾種類かの作物を切り替えながら栽培した後に多年生作物を植えるということは、余呉にかぎらず広く報告されています。たとえば、かつて四国・高知の山地ではミツマタが、今日でも山形・温海ではスギやヒノキが、はるか遠くインドネシアのスマトラの村ではパラゴムノキ（栽培ゴム）が焼畑地に植えられてきました。そのために私は、桑は焼畑後に植えられていたのだと思っていたのです。

けれども、菅並の方によれば、「焼畑を拓くと桑はヒトリバエしてくる（自然に生えてくる）」とい

うのです。そして、こうした桑はヤマグワとよばれるのだそうです。ヤマグワの葉は常畑で栽培する桑とは栄養価がちがうためか、これを与えた蚕は病気になりやすく、ヤマグワの葉は栽培桑よりも高い値で売買されていたそうです。菅並でも戦後しばらくまで養蚕をしていましたが、菅並の人はヤマグワの葉を自宅の蚕に与えるほかに、川下の商人に売っていたようです。

こうしたちょっとした会話のなかで、菅並の方々から養蚕にまつわる話は次々と上がってくるのでした。当時は河原やわずかな空き地でも桑を栽培していたこと。今でも集落脇の河原には桑の株が残っているが、草刈りのときに一緒に刈られてしまうため大きくなることはないこと。当時の家の中は蚕棚だらけで、子供たちは蚕棚の横で丸くなりながら寝たこと。当時の菅並の暮らしと焼畑・蚕・桑の結びつきは想像以上に深いものようです。

こうした驚きとともに、もうひとつ思い浮かんだことが「火入れは山の潜在力を引き出す」ということでした。これは朽木 FS の今北研究員がよく口にする言葉ですが、菅並ではその一例がヤマグワなのでしょう。林野への火入れ（あるいは伐開）によって、それまで息を潜めていた植物がむくむくと姿をみせるということは、植物生態学で学ぶところの植生遷移として位置づけられ、さして驚くことではないかもしれません。けれども、こうして、焼畑や養蚕というかたちで、人びとの暮らしと特定の植物種とのつながりが具体的に浮かび上がってくると、新鮮な驚きと興味が湧き上がってきます。これから、ヤマグワを切り口に菅並の暮らしについて深く話を聞いていこうと思っています。

この他にも、それまで眠っていた植物が焼畑によって目を覚ましてくるかもしれません。焼畑地では、滋賀県立大学の野間直彦先生が植生調査を併行しています。どのような植物相の移り変わりがみえてくるのか、乞うご期待。



写真3: 昨年の火入れの様子。

亀岡フィールドステーション

あかりがつないだ、村と川の記憶

大阪商業大学経済学部 原田禎夫

昨年、60年ぶりに復活した保津川の筏流しは、その後、筏に必要な材木の伝統的な伐採技術や金具の製作技術の再現など、流域文化の再発見ともいべき取り組みに発展しているが、その原点は2年前に行われたあるイベントにあった。

そのイベントとは、保津川の上流にある日吉ダム（京都府南丹市日吉町）で毎年夏に行われている天若（あまわか）湖アートプロジェクトである。このプロジェクトは、ダム建設によって水没した集落の夜景を、昔の地図をもとに湖面に浮かべた「あかり」によって再現しようというものである。

日吉ダムは1998年（平成10年）に完成した多目的ダムで、天若湖と呼ばれるこのダム湖の下にはかつて5つの集落があった。在りし日の村の姿を記録した「日吉ダム水没地区文化財報告書」（日吉町編、1998）には、文字通り川とともに生きた、実に豊かな人々の生活文化があったことが記録されている。天若湖アートプロジェクトとは、「あかりがつなぐ記憶」をテーマに、このような地域の営みをアートで現在に伝えようというものである。

そんな中、かつて丹波山地から京の都まで材木を運んでいた筏を、流域をつなぐシンボルとして作ろうというアイデアが出された。当初は、筏を浮かべて子供たちに乗ってもらおう、あるいはミニチュアでかつての長大な筏の姿を再現しよう、と喧々譁々の議論が交わされたのだが、保津川下りの船頭衆から「かつて保津川を下った伝統的な筏を作りたい」という声が上がった。さらには、筏流しを経験したことのある元筏士は京北町と亀岡・保津町にたった3人しか健在でないこともわかった。スタッフの間でも「今、この技術を記録しなければ」と危機感が強まり、この川に伝わるホンモノの筏を作ろう、ということになった。

そして2年前の8月19日、日吉ダムに設けられた公園で、「荒川組み」と呼ばれる保津川独特の筏が元筏士の酒井さんの指導により再現された。わず

か3連であったが、忠実にかつての筏を組むことが出来た。しかし、その筏は水に浮かべることが出来ず、川を下る筏の姿を期待して集まった観客からは「水に浮かべへんだら、筏と違う」という声も聞かれた。その時の悔しさを胸に我々は「保津川に筏流しを再び」と取り組んできたのである。

今年の天若湖アートプロジェクトは8月8日（土）・9日（日）の2日間行われる。今年では最後まで残った上世木集落も加わり、初めて5集落すべての「あかり」を再現する予定である。この上世木は、かつて筏の中継地として栄えた地でもある。川と共に生きてきた人々の暮らしを、夜の湖に浮かぶあかりの中に見出すことが出来るのではないかと楽しみにしている。



写真1:天若湖アートプロジェクト2007で筏組みを指導する元筏士の酒井さん(左端)。この経験が、保津川筏復活プロジェクトを進める大きな力となった。



写真2:天若湖アートプロジェクトのこれまでの本にまとめられた、『あかりがつなぐ記憶：天若湖アートプロジェクト』（天若湖アートプロジェクト実行委員会編、キョートット出版、本体800円＋税）

催しのご案内

■焼畑での火入れと耕作(朽木 FS)

朽木 FS の活動先である滋賀県余呉町菅並集落の原野で焼畑を拓きます。以下の日程で作業をおこないますので、ぜひご参加ください。

1. 日時: 8/9(日) 焼畑火入れ準備
8/10(月) 焼畑火入れと播種
各日とも午前9時半に現地集合。収穫は11月初旬~中旬を予定。
2. 場所: 滋賀県余呉町菅並地区
3. 持ち物: 軍手、作業に適した服装・靴(現場はかなりの急斜面です。また、化粧の衣服は熱で溶けやすいのでご注意ください)

4. 参加費: 8/9は700円、8/10は1,500円(各日とも昼食代・保険代を含みます)

*準備の都合上、参加を希望される方は、8/7(金)までに朽木 FS 研究員の増田(kamasu@cseas.kyoto-u.ac.jp)までご連絡ください。また、現地までの交通についても増田までお問い合わせください。

■まちの畑で蕎麦の種まき(守山 FS)

1. 日時: 8月22日(土) 10:00~
2. 集合: JR 守山駅に9:30
3. 内容: 守山市中心市街地の伝統的な畑地で、蕎麦を栽培します。今回は、その種まきです。
4. 参加費: 無料

*準備の都合上、参加を希望される方は、守山 FS 研究員の嶋田(tamalovestama@hotmail.com)までご連絡ください。

ラオス出張報告 2

生存基盤科学研究ユニット研究員 矢嶋吉司

今年2月25日から3月13日まで、トヨタ財団アジア隣人ネットワークプログラムの助成プロジェクト(代表:安藤和雄)で、ラオス国立大学農学部から3名を招へいし、守山 FS、亀岡 FS を中心に日本の農村や都市が抱える問題や取り組みについて、特に、南丹市美山民俗資料館、亀岡市文化資料館の文化や伝統保全を通じた地域振興策の視察研修を実施しました。その際には多くの関係者の方々の協力をいただきありがとうございました。

ラオスに帰国後、3名は日本での見聞や経験を、農学部で報告したそうです。特に、人口減少と高齢化が進む過疎問題が印象深かったようです。近年、ラオスでも急激に開発が進み、伝統文化の喪失や農村社会の変容が問題となり始めているからでしょうか。

ラオスではプロジェクトを実施する2村を選び、関係行政の協力を得て、5月に現地です業を開始する予定でしたが、豚インフルエンザのため、予定より一カ月ほど遅れて、ようやく、6月15日にビエンチャン特別市サタニー郡庁舎、ドンバン村、タチャンパ村の訪問ができ、翌16日に関係者の顔合せ兼オリエンテーションワークショップを行うことができました。

ワークショップには、日本から東南アジア研究所の安藤、虫明、矢嶋の3名、農学部からトンリー学部長、副学部長2名、学科長1名とプロジェクト担当3名、現地 NGO の参加型開発研修センター(PAETC) から代表と担当者の2名、行政サイドからサイタニ(Xaithani) 郡副郡長、行政地区長、行政副地区長、農業普及員など5名、村の関係者それぞれ2名が出席しました。農学部と東南アジア研究所の協力の経緯、経済中心の農村開発の問題点と伝統や文化を通し



ワークショップ参加者。

た日本の地域振興、日本研修視察旅行の経験と学んだこと、健全な社会発展のために果たす文化、精神の重要性、アタプー県の村の文化保存活動の事例、村でのプロジェクトの活動内容などが説明された後、出席者から伝統や文化の保存の必要性、農村開発、村の発展への協力の必要性などの意見が出されました。関係者の協力も得られワークショップを終えました。

最後に、プロジェクトを実施する2村を紹介いたします。ラオス国立大学農学部はビエンチャン市から北東に30kmの新パサップ(Phaxap-Mai)村、通称ナボン(Nabong)地区にあります。

ドンバン(Dongbang)村は、農学部から西に約7Km、約150世帯、住民のほとんどが仏教徒で大きなお寺があります。村は、約200年前に出来たと言われ、何度か疫病が流行し離散、再定住を繰り返してきました。村の周囲は開墾され森はほとんど残っていません。大きな敷地に家が建てられ、ゆったりとした生活ぶりがうかがえる村です。農業は機械化が進みましたが、現在でも伝統的な古い農具が村のあちこちに残されています。

一方、タチャンパ(Tajampa)村は、農学部の北東5Kmほどのグム川(Nam Ngum)の対岸にあります。20年ほど前、北のシエンクワン(Xiangkhoang)県から移動してきた黒タイ族の人たちが作った村です。最近もたびたび人が移入しています。88世帯が暮らし、精霊信仰のため仏教のお寺はありません。以前、灌漑プロジェクトが実施され、耕運機や灌漑ポンプなど農業機械が普及しています。用水路が張り巡らされた田んぼもありますが、村の周りには森が残り今でも時々焼き畑が行われています。日本では自殺する人が毎年3万人以上もいるという話が出されると、「ラオスでは住む家と食べるコメ、それに家畜があれば、くよくよと悩む心配ごとは何もない」という言葉が返ってきました。現代人の生き方について、再考させられた機会でした。